

# 総合人間科学講座 倫 理 学

## 1 構 成 員

	平成18年3月31日現在
教授	1人
助教授	0人
講師（うち病院籍）	0人（ 0人）
助手（うち病院籍）	0人（ 0人）
医員	0人
研修医	0人
特別研究員	0人
大学院学生（うち他講座から）	0人（ 0人）
研究生	0人
外国人客員研究員	0人
技術職員（教務職員を含む）	0人
その他（技術補佐員等）	0人
合 計	1人

## 2 教員の異動状況

森下 直貴（教授）（H14. 11. 1～現職）

## 3 研究業績

数字は小数2位まで。

	平成17年度
(1) 原著論文数（うち邦文のもの）	1編（ 1編）
そのインパクトファクターの合計	0
(2) 論文形式のプロシーディングズ数	1編
(3) 総説数（うち邦文のもの）	1編（ 1編）
そのインパクトファクターの合計	0
(4) 著書数（うち邦文のもの）	2編（ 2編）
(5) 症例報告数（うち邦文のもの）	1編（ 1編）
そのインパクトファクターの合計	0

### (1) 原著論文（当該教室所属の者に下線）

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 森下直貴, 「田辺 元「種の論理」と〈ナショナルな共同性〉—和辻倫理学と対比しつつ」, 『哲学と現代』21号, 2005年, 13-27頁

インパクトファクターの小計 [0.00]

(2) 論文形式のプロシーディングズ

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Morishita, Naoki : The Invisible Public Realm and the Visible Public Realm-The Medical High technology controversy in Japan. The 1st International Workshop on Ethical, Legal & Social Aspects of Bio-Nanotechnology, Surrey U., UK., April 3-5,2005.

(3) 総 説

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 森下直貴：治療の〈外〉へ超えてか，治療の〈内〉へ超えてか．書評L.カス『治療を超えて—バイオテクノロジーと幸福の追求』青木書店．『図書新聞』2006．2月号．

インパクトファクターの小計 [0.00]

(4) 著 書

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 森下直貴「〈文明あるいは近代〉と〈個人〉と〈ナショナルな共同性〉—日本哲学の思考類型・和辻倫理学の場合を中心に」、『「戦後日本」と切り結ぶ思想』青木書店，2005年，180-206頁．
2. 森下直貴ほか共訳，W.R.ラフルーア著『水子—〈中絶〉をめぐる日本文化の底流』青木書店，2006年1月．

(5) 症例報告

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 庄司進一・大林雅之・森下直貴・白浜雅司・赤林 朗：第1回卒後初期臨床研修における倫理教育指導者ワークショップ報告．医学教育37(1)9-15，2006．

インパクトファクターの小計 [0.00]

4 特許等の出願状況

	平成17年度
特許取得数（出願中含む）	0件

5 医学研究費取得状況

	平成17年度
(1) 文部科学省科学研究費	1件 (1,500万円)
(2) 厚生科学研究費	0件 ( 0万円)
(3) 他政府機関による研究助成	0件 ( 0万円)
(4) 財団助成金	0件 ( 0万円)

(5) 受託研究または共同研究	0件 ( 0万円)
(6) 奨学寄附金その他(民間より)	0件 ( 0万円)

(1) 文部科学省科学研究費

森下直貴(分担者), 生命ケアの比較文化論的研究とその成果に基づく情報の集積と発信. 平成15-17年度基盤研究(B), 代表者・松田純静岡大学教授

## 7 学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	0件	0件
(2) シンポジウム発表数	0件	1件
(3) 学会座長回数	1件	2件
(4) 学会開催回数	0件	0件
(5) 学会役員等回数	0件	2件
(6) 一般演題発表数	0件	

(1) 国際学会等開催・参加

4) 国際学会・会議等での座長

1. 森下直貴, 国際シンポジウム「いのちとケアー生命倫理の比較文化」静岡, 2005.9

(2) 国内学会の開催・参加

3) シンポジウム発表

1. 森下直貴: 田辺元「種の論理」をめぐって. 名古屋哲学研究会・シンポジウム「戦時下日本の文化構想」, 名市大, 2005.4.24

4) 座長をした学会名

1. 日本倫理学会, 一般発表, 岡山, 2005.10
2. 唯物論研究協会, シンポジウム, 秋田, 2005.10

(3) 役職についている国際・国内学会名とその役割

日本医学哲学・倫理学会, 理事

日本生命倫理学会, 評議員

## 8 学術雑誌の編集への貢献

	国内	外国
学術雑誌編集数(レフリー数は除く)	0件	0件

## 9 共同研究の実施状況

	平成17年度
(1) 国際共同研究	0件

(2) 国内共同研究	0件
(3) 学内共同研究	0件

## 10 産学共同研究

	平成17年度
産学共同研究	0件

## 11 受賞

### (3) 国内での受賞

森下直貴，第1回学会賞，日本医学哲学・倫理学会，2005.11

## 12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

1. 科研費研究の一環としてアメリカ人の日本研究者による名著『水子』の訳出。研究者の間では久しく待望されていたが、3年を費やしてようやく刊行することができた。これは日本人の死生観の底を流れる感じ方ないし思考方法を独自の視点から解明したもので、生殖医療や人口問題を考えるための道標となるにちがいない。なお、訳出に対する評価は下記の書評から明らかである。
2. 日本哲学の研究。明治以降に形成された「日本哲学」を、近代文明に対するナショナルな共同性への傾斜という視点から、和辻哲郎と田辺元に絞って解明した。今後は引き続き、下記の「規範の存在論」の一環として西田幾多郎、三木清等を取り上げる予定である。
3. 規範と制度の存在の研究。感情（パトス）論の視角から社会規範の生成を論理的に再構成すべく研究を進めた。その結果、不透明な「慣習」の奥底に、規範へのうごめきを捉えることができた。すなわち、複合パトスの構造、不和・争い・暴力・格差および戦争・差別の必然性、根源的な濟まなさのパトス、それを利用した共同意識の創出（宗教の発明）、不和等を禁じるための規範と制度の創設という論理的展開である。もとより、制度の形成は過去の一回限りの出来事である（その繰り返しの確認として慣習がある）が、規範の不断の生成という視点は、新たな生命倫理の問題に直面している現在にこそ必要である。次年度はホップズの社会哲学の徹底的な読解から研究を一步前進させる。

## 15 新聞、雑誌等による報道

1. 毎日新聞、『水子』書評，2006.2.12
2. 中日新聞、『水子』書評，2006.2.28夕刊
3. 朝日新聞、『水子』書評，2006.3.19